

横浜市立大学学術情報センター

# 貴重書 月替わり展覧会リーフレット (176)

2026年5月の作品は  
『江戸大節用海内蔵』  
—江戸時代の日用辞典—

## 展示テーマ

～節用集の付録から見る当時の生活～

2025年現在において、人々は漢字を調べる際、何を活用するだろうか。スマートフォンの変換か、インターネットで検索するかの二択だと思う。では、近世ではどうしていたのか。近世では、日常的に字引、漢字辞典のような本が使われた。節用集とは、近代まで使われた字引であり、さまざまな付録が付いているものが多く存在する。元は知識階級の間で使われていたが、室町時代から商業出版され始めると一般の人々にも広まり、民間の興味を引くような付録がつくことが多くなった。明治時代初期まで広く使われていたが、西洋の辞書に次第に淘汰され、姿を消していったため、現代にはない種類の書物である。

本展示では、江戸時代後期の節用集の一つである『江戸大節用海内蔵』(以下、節用集という)を紹介する。まず、この節用集は、2冊で構成され、1冊目は付録、2冊目が字引となっている。本リーフレットでは1冊目の付録が収録された1冊目を紹介する。目次を見ると、多くの付録が掲載されていることがわかる。歴代天皇の生涯が書かれている大日本書紀、江戸の年中行事が描かれている東都年中行事、文書の書き方が分かる古状掬など、さまざまな日常で役立つとされた項目が並んでいる。すべての項目を紹介することはできないが、この中から四つを厳選して紹介し、その生活の一部を垣間見る。

『江戸大節用海内蔵』

全2冊

江戸時代、文久3(1863)年

版元：山城屋左兵衛

縦27cm × 横19cm

図版1 江戸大節用海内蔵 表紙



展示のみどころ  
～多種多様な付録～

## (1) 序文

まず、序文には以下のようなことが書かれている。(下線部は注あり。)

「それ節用集と号するもの、往年より梓に鏤て、江湖上の調宝となつて  
いる。しかれども猶誤謬なきこと能はず、  
ゆえに都鄙の博識達、世俗の過に陥るを憐み、よく校訂して襍の板  
の謬りを更るもの、所謂汗牛充棟に至る、しかれども古語にはく  
校書ハ落葉を掃ふが如し、随て掃へば就て落ると、現に限りある眼  
をもて、限りなき書を訂すは、古人も難しとする所、こゝに於て蘭山子も  
また彼老婆心をもて、昼ハ終日燈火にハ眠を忘れてこの書を訂し、江戸  
大節用と題号せり 加 往古より、在るところの節用集は、たゞ俗用  
を専らとして、仮字の古格に抱へらず、將に児童をして自然、その過  
に陥すなり、と是さへも深く歎き、精くその古書に因て、音訓の古格を  
訂し、一遍の功を終ふ、但この書の大部にして、備書厥人日を累ね、月  
を積ても竟に果たさず、空しく数年の光陰を過、今般時來つて落成  
し、世に布施す事とハなりぬ、さハれ蘭山子は先の年、根の国に赴きた  
り、故に愚老にこれを委ぬ、余不敏なりといへども、書肆請て歎されば、  
則その足ぬを補ひ、猶誤れるを改めぬれど、既に梓に彫たらば、また  
奈何ともしがたきことなり、他日再刻の時に至らば、たゞ一点の曇りな  
き、雅俗有用の書となるべし、さハれ今この書を以つて、日用便利  
この右に出るなれば、四民おのく坐右に措て、その益鮮なからめ  
やも」

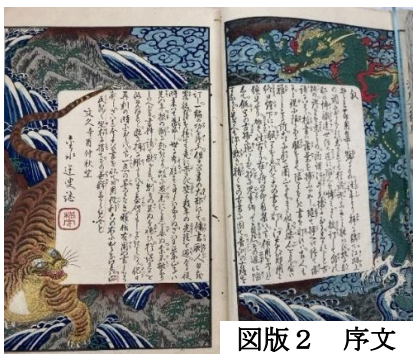
序文の最後には、「文久辛酉仲秋望 金水迂叟誌」と書かれている。その要旨は、「知識人は、世の中の節用集の誤りが多く、大衆がその過ちに陥

るのを憐れみ、この節用集の前の編者である蘭山子誤謬をできる限り直し、音訓の古格を書き込んで節用集を編纂した。昨年蘭山子が亡くなり、今の編者はその仕事を引き継いでさらに校正をしたが、既に木版ができていたのでどうしようもない。他日また出版されることになったら、この節用集はただ一つの完璧な雅俗有用の書となるだろう。まあ、今この書の右に出るものはないので、人々の近くに置く利益は少なくないだろう。」というものであった。

このことから、この節用集の大部分を編纂したのは「蘭山子」であるが、最終的に序文を書いた人は松亭金水、別名中村経年（1797～1863年）ということが分かる。蘭山子とは、江戸時代の高井蘭山（1762～1838

年）という読本作者である。しかし、当時実際に節用集の誤謬がおおかったのか明らかにはならず、今後の課題とする。

注）梓…木版、鑄て…彫られ、都鄙…都会と田舎、汗牛充棟…部屋が本であふれていること、校書ハ落葉を掃ふが如し…いくら辞書の誤りを正してもなくならないこと、傭書厥人…人にやとわれて文字を書くこと、歌…やめること、根の国…この世ではない世界、あの世、迂叟…年老いた人がへりくだって自分を表す言葉



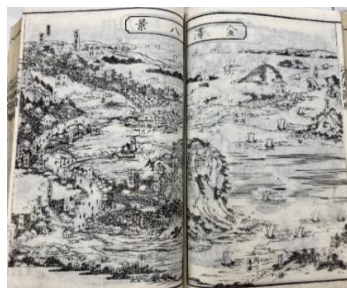
図版2 序文

## (2) 地図

この節用集には、江戸の街並みの絵や街道の関所が一覧になっている絵など、数多くの地図や現地の絵が掲載されている。

### 【金沢八景の図】

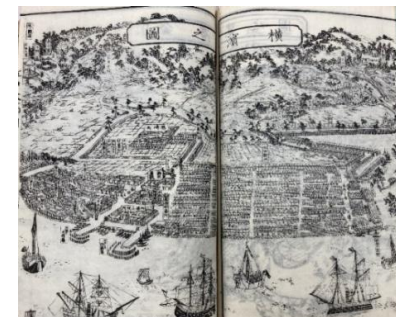
金沢の八つの名所である野島夕照、平瀨落雁、乙艦帰帆、洲崎晴嵐、瀬戸秋月、称名晚鐘、小泉夜雨、内川暮雪の場所が示されている。名前の由来は、中国の長沙という地には瀟湘八景という八つの景勝地が読まれた地があり、1694（元禄7）年に明の僧侶心越禅師が能見堂からの金沢の地を瀟湘八景と同様にその八つの名所を詠んだことである。江戸時代には多くの人がこの地を訪れ、その景色に魅せられている。



図版3 金沢八景の図

### 【横浜の図】

江戸時代の横浜は、まだ漁村だと思われるかもしれない。しかし、この節用集が出版されたのは横浜が開港され横浜町または五ヶ町が造られた安政6（1859）年よりも後のものであるため、横浜は漁村ではなく急速に開発され、多くの船が来航する港町となっている。また、文久2（1862）年の時点で生麦事件が起こっているため、少なくともこの地に外国人が既に生活していた背景がある。また、この地の絵が掲載されているということから、当時民衆は横浜に対し興味を持っていたことが読み取れる。



図版4 横浜の図

### 参考文献

- ・佐藤貴裕（2017）『節用州と近世出版』和泉書院 7～9頁
- ・横浜市「横浜市のあゆみ 略年表」<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/ayumi/chronological-table.html>（最終閲覧日：2025年11月30日）
- ・国立国会図書館「あの人の直筆」第一部 近世/第三章 科学の目 [https://www.ndl.go.jp/jikihitsu/part1/s3\\_1.html](https://www.ndl.go.jp/jikihitsu/part1/s3_1.html)（最終閲覧日：2025年11月30日）
- ・国書データベース『江戸大節用海内蔵』 著作詳細 <https://kokusho.nijl.ac.jp/work/110247?ln=ja>（最終閲覧日：2025年11月30日）

### あとがき ～貴重資料に触れて～

節用集を読んだことで、近世において需要がある情報がかなり現代とは異なり、時代によって人々の興味が変わっていくことが大変興味深いとおもいました。節用集の文章はくずし字ではありますが、フリガナが振られていたため、先生のお力をお借りしながらも自力でくずし字で書かれた内容を解説することができ、うれしく思いました。これからもくずし字に触れ、古い資料に親しみたいと思います。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。

また、利用は学術研究目的に限らせていただきます。

※過去の展示はオンラインでも公開中です！

※第177回展示は令和8年6月上旬からを予定しています。



令和8年5月1日発行

令和7年度 日本文化史B受講生 編集

236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2

横浜市立大学 学術情報センター